

自叙傳材料錄

大正七年二月下浣起筆

特別
14
1919
751



材料とくまらふ者

一 憶起録 一名 未終り記

明治二十七年頃迄の事を記し
る迄の事々々自叙傳

一 日誌 約五丁冊

二十五六年前らと断絶する所
あり

一 祖先の素歴 冊波石村録 絶筆中
あり

一 宗家の素歴 余の材料を併合し

往年の遺書等のものを社に掲載する
并に同材料を以てして其の故文項

のそとに世界ニとて、海に揚ぐは
こゝろ

一 吾家の歴史 祖父自筆の日記、家記

関し、手記のり、日記し、こゝろ

一 養秋園續 祖父自筆の家記、帳面

形のもの

一 碑文 三箇の碑文

一 北米叔活 余の著書記

一 慟笑記 先考の桑俵の関し、日記

一 江戸の歴史と在社中の歴史 江戸の切抜
自筆の書、手本

一 仰者録 江戸の切抜
高田の著、在社中の四部録 江戸の切抜

一 新のそとに、代近境、江戸の切抜

一 早稲田の歴史、代近境、江戸の切抜

一 田舎刊行会、仕末、江戸の切抜

一 大隈の復讐、会、仕末、江戸の切抜

一 房牒の誌

江戸のそとに、大隈の復讐、会、仕末、江戸の切抜

一 早稲田のそとに、表彰、江戸の切抜

一 日校支、会、江戸の切抜

一 逐床の誌

一 無資格書、伴書類

一 双魚書、古、簡、目録

各年及花什記

家存印譜

繫獄記 二冊

協賛日誌

柳浪紀略

無夢談

校規錄

轉居錄

回春日誌

外報考略

岡山結社、山田平兵衛、田原柳城傳

早稲田大学の紀念録

無夢談 在獄中の
日記

外報考略 考略の
由

為公施記

著書

新華教万巻

里白日誌

高田修下教論説 悔存論存

高田修下教論説 張之教冊

誓願の行

高田修下教論説 判決中
之信

今古雅談

印刷本 高田修下教論説
の再刊

和對面紙

新編改法史

高田修下教論説の
再刊

高田修下教論説

一 鶴田法印傳

一 西郷北録

一 西郷紀行

一 三河紀行

五十年の戦い
印のついでに
山の家に入
りて北東

西郷の戦い
西郷の戦い
西郷の戦い

二十三年のついで

二十七年のついで

自叙傳順序、大正七年二月廿号起筆

~~昔~~ 自叙傳を著せんとするこのまじ

進むる足段と身辺麻痺を感ず候し自叙
傳と云ふの思ふに悲觀の致果とあるが

自分の往歴の後、貴可掬くあるものあり
唯、此の頃と謂ゆる自叙傳に、
昔の人の著るもの、
何れか道に材料とある
を思ひ立ちて也

友人張りたることと、其の傳記絶念候を、
編
りたる人と、余の著るもの、
山極堂の上方の傳、
山田一平海集、

元々余の翰種多き人にして、其後必り二
回の此念録を余の目録終りに出来たるものなり、
岩一守の傳天下に記あり、是も田村田原柳
威の傳も田村なり、是も亦の伝五十年後記
あり、余のめり傳をみるに、その記、其の田原の
そと也いしに、これ七老の先は折せり、
此の田原の傳を揮筆せりとのゆゑ、
折る點創の仕末、こんを極極く、よふか、
此あり傳定と自叙傳とを併り、
あり、自分の事蹟と傳へること、
そと、人の伝に、
今も廿年前も思ふ所、
自叙

傳へしき、
五六十枚の冊子、
起程一名、
見たり、
是も亦も出る、
ある、
これ、
しき、

自分の行歴、
後の、
し後の、

ひあつとくへい、憶ひぬ氣を、後の市歴う
必要ひあつたふん

大患後、自分の復沈し、且つ他派を格陵し
得たりと、執味のお蔭ひあつた、此の執味を
の方面に涉つて、その冬方面の執味史、
山十七、
ふよあつた、
天分、
うが、
いふひあつた、
う出まぬ

大抵の人の傳、
十二

人の性格も、
自分のいふ、
つとむ、
とも、
動機、
つとむ

執味と、
ふ、
業、
いふ

自分と、
いふ、
いふ

材料の豊富である。二十年計の日記を初め
る。そのうち大巻後の多きこと、略々
その中の餘り、日記と或るものに
二トを以ての料、と云ふこと、日記の
おこつての事、と考へて教へて、隨筆、校
の、その約なる冊位である。その外、
日記、揚動、と自分の海法、日記の、こと、
七、或ると、或る、教へて、おの、保、
九、その、大、概、校、料、の、
今、お、の、思、ひ、主、を、お、す、に、け、る、
と、も、さ、ら、な、い、と、の、さ、ら、な、い、と、の、
考、ま、ら、け、て、見、る、と、卷、の、
十二

先づ、入、り、の、
二、所、
う、活、歴、の、方、
入、る、程、の、
い、ま、
あ、る、
略、の、年、
の、ま、の、自、人、
た、の、と、無、い、
記、
の、日、法、
も、さ、ら、な、い、

先づ、入、り、の、
二、所、
う、活、歴、の、方、
入、る、程、の、
い、ま、
あ、る、
略、の、年、
の、ま、の、自、人、
た、の、と、無、い、
記、
の、日、法、
も、さ、ら、な、い、

表し此ゆゑに之れを用ゐるは、
無意味徒勞の事とせらるれば、
あ

年表を以て凡そ自分の事なる事歴を
けて居るべし、その事と志ひ起す
あつて、その志ひ起す事の中、
時勢や関係の程々の材料を配せ、
深ふいあつて、その年表の内、
其江戸の中、
居ること、
事にあつて

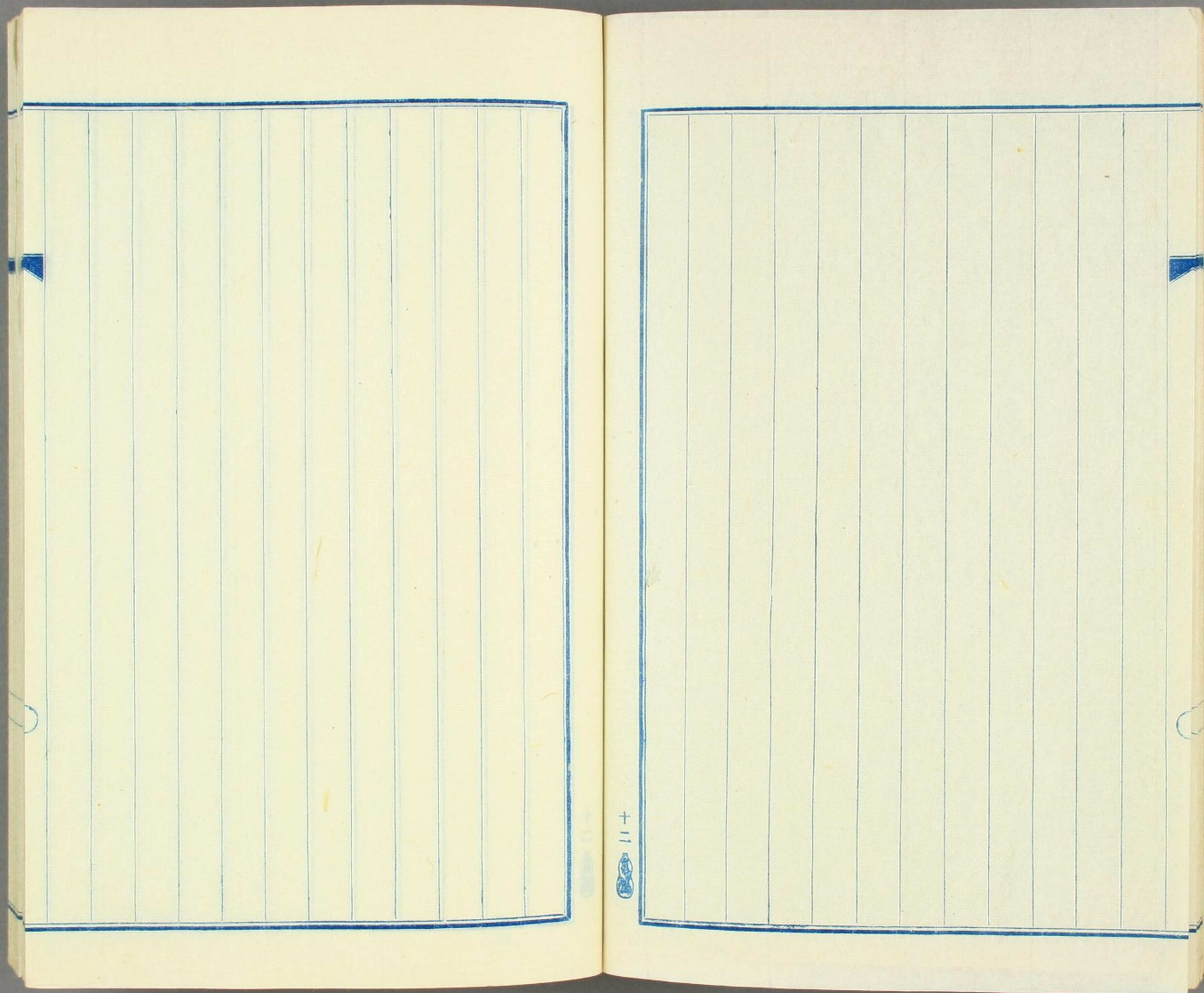
己が毎年の體に家祖の
き記すゆゑの考も、
此所が定然と免束と
七のをあつて、
二時間、
宜う断片的に、
ける故に、
九を極排し、
歎息の念、
あつて、
つと、
く記せん、

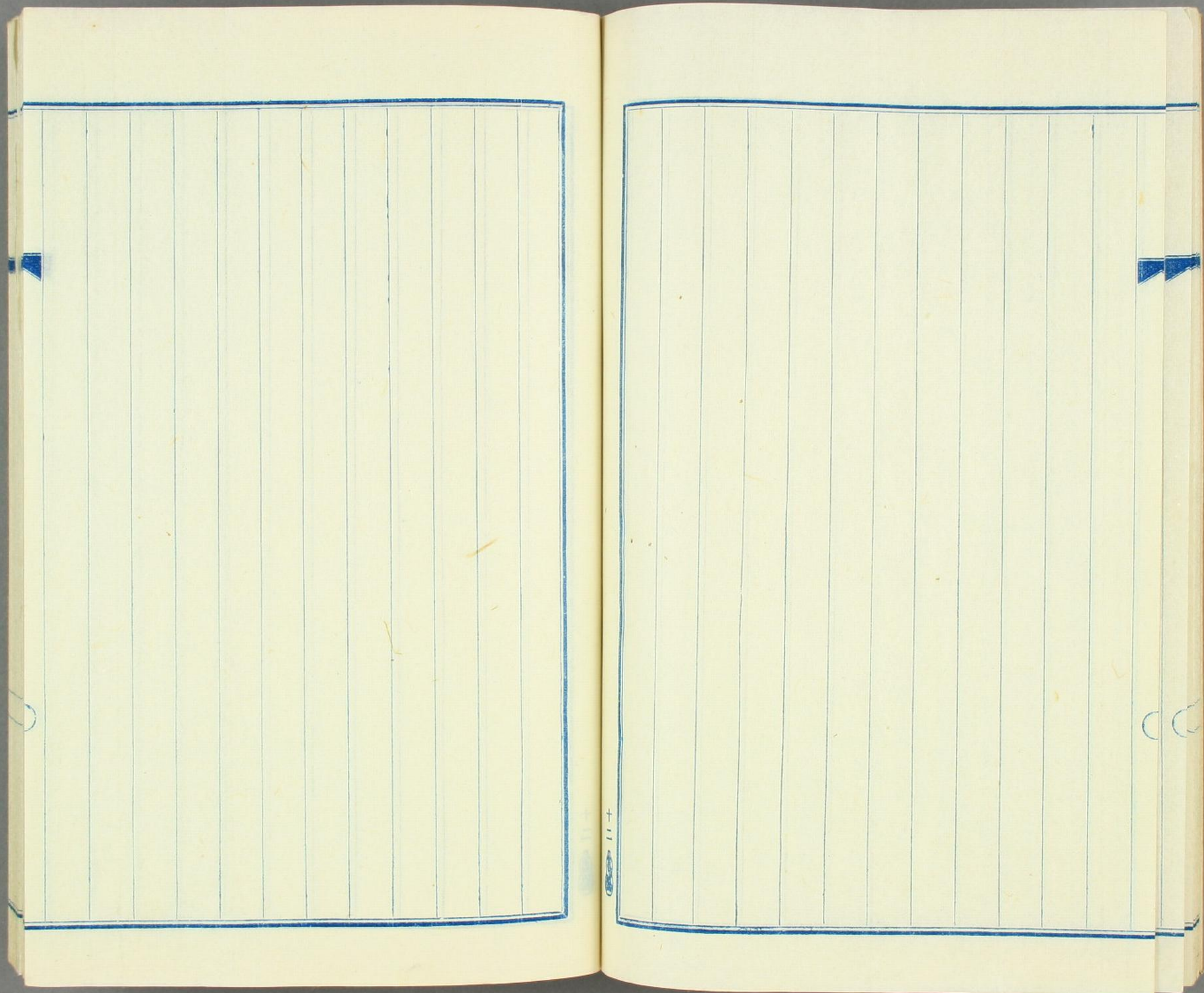
九の

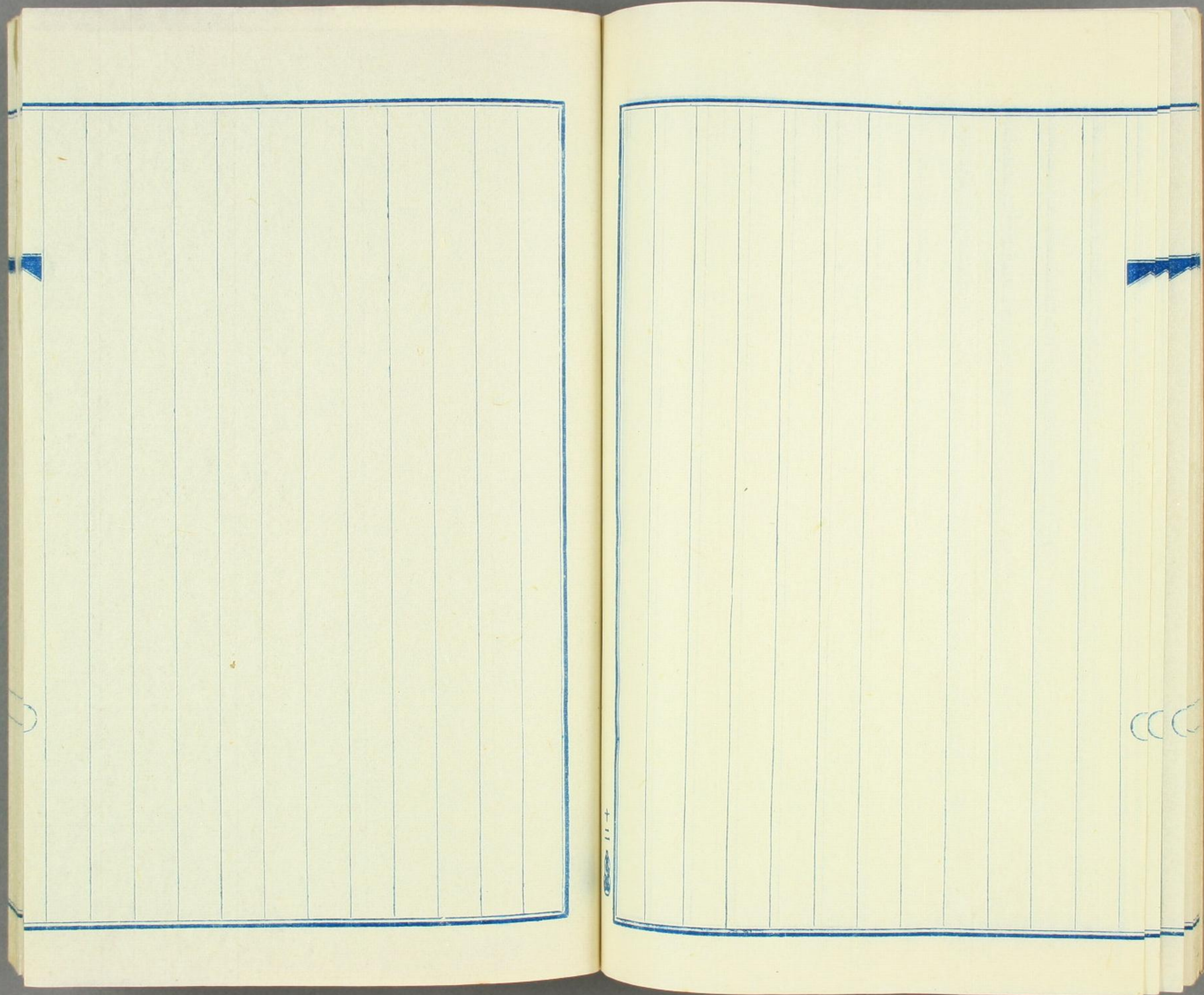
七二〇〜二二〇の事と企つて投りて二二〇七
るやう大隈侯とマメにえまげぬやう
も情をん欺るんや一先して茶と
投す

大正七年二月廿五日の録









11+

幼年時代 ありまじ

- 一 幼少の頃を誰のて歴史と云ふべきものとも無
英雄立派傑しむ然りと流人ゆ其他をや
- 一 併し幼年の頃の周囲園境に就ては許さ
へき事やが無いつもさ、自分ハ平凡心あるが
園境ハ平凡心無し
- 一 自分の生れ地を著述元年二月平^{十七}のびそ
んとし^{十七}キ^{十七}を^{十七}経て(三月三)根田の麦う
起り井伊大元う殺せん、攘夷論う作ん
こせしものや即ち自分の生れ地めいある
- 一 自分ハ戦のこさふれこころある、自分ハせん

此ありは天地う狭くううて井伊大元う世と
辭し此の心ありと、自分が大隈侯ひせると
この或言に而吾味を生きたるの心ありアハク
一 自分の幼名を雄之助とすふに、英雄、ちや
うとありうどうか知らんか父う酒飲み心あ
つたあり印時をびくあつた(今の肥後炎)
：誰つた心、終に名を詢と改めた、あ
澤、上杉強信の名を曰くして病癒と感
應せんと迷信七千傳つて改名し此の心あり
ふ、英雄とすふは、病癒心印、征勝の出来
才敏の誇りとす、大高傑の名を、藉
り此の心あり、果してある心とせん

一 自分の名に就ておういりて三十前後春城
とすふを強として居る、これと強城の春の
山とすふ此の心、既に強信の一字をえり更
とす、其の城池の名を取つて、強とす、強信
を一身に有する、強をゆくと、強は、強
い強心あり、自分う、一家を強く
する、ちやうは、此の心、強く、つと、友人山田
真南(春し)と、余と送る、長つる心あり、
此の心、強とす、強心、真南と強心、
此強信の印を心とせん、強心、強心、
強心の心あり

一 自分の強の革命の途中、生ん、其心

の間は生長して、終つては革命の戦
闘に遭遇し、此と云ふものは、抑教ひある念
は自分の心の中に七世に亙る自分の心の中に
天飲心ありて、革命戦の争ひの第一は
つひとうらむ

一 戊辰の戦よりして既に自分の宗家の兵燹に罹
つた、自分の家が焼けた代り、今津の寺に
うらましく再泊し又官軍の大兵に七世まで
あし、友兵のありなき革命をせしむる家
の金印を密かに奪ひ、革命軍に託して代り
使ひぬるサシく又忘るゝん

一 此の戦役の天地は既に危殆と云ふ所より西

高野原の古田村と云ふ所は、此の戦
闘に納屋にありてを幸いし、革命の戦
闘よりして即ち悲しむべきもの起つたと云
ふべき信濃川が池に溢して、水が堤防
を潰し、堤下の家に此の戦にありて、
物事は危うく艇に乗つて危うく天の満
ちる泥舟の流の上で漂泊して、事ある
茅屋のいくつもの海流に流され、目前を
くろく危うくと戦うるも、悲惨の感と記
すべし

一 火難を耐へて、革命の戦にありて、
革命の戦にありて、革命の戦にありて、
革命の戦にありて、革命の戦にありて、

よりその北方面ととも敵多し氣分ハ通漫
しとそを以て中津ありとて敵多しとありて西
条も危殆と云ふ所、とて海村の毒川、加
難しとことも記憶にありと居る。

一 現今此の未だその革命敵と云えりていふ
るも、其後同族部と云ふ所の事、橋本
一と、またと此らうとて地方津村政廳を
眼前、元、歴史中の人物も橋本とこと
ありと、

一 またその何と云ふと革命敵と云えりては、
府の建えん、その位地と云ふは、自ら
合のつとありて、自ら今の初裁の家、址

乃ち成底の兵變、置つた家家の町部址
に建えん、其後府を廢し、ありての建
つたも、その同じ所あり、城の片田舎に
府の政廳の設けん、とて、いふ所、
とあり、が、其を全くと匹敵とて、
家の多し、うと天領のあり、故に地形の
とハ無ハ

一 地方政廳を設く、とて、孰も其家、
いハ無ハ、とて、あり、とて、
を寄附し、とて、
家の寄附の材木とて、
運搬せし、とて、

と云く杖木の上を載つて襦袢の儀を着し
かりと佩い家前を遠く去る女地形の
字家の邸を幼く呼びし。田圃を土を
高く盛り上げたる。此名ありと出づ
此よの地ありて七七歳位なりと云ふ。無論
自分と補休するもの。日乗してそつた。切
あつた。自ら之を総替へある。然るにこゝ
一橋の起つた。この地形は。築く
ある橋の句配り名をいふ。以てある車に
此橋と云ふ。途端に自分から車上を降
後して車輪を觸れしが。目もひら
車を同時に止まうと。表し車を止ま

らるんは。此の車を見る。自分
無論。この地あり。天祐と云ふ。此
ハ夏の佩い。此の地あり。靴を
一。刀の車輪を。此の地あり。靴を
ハ此の地あり。自分から打傷を。此の地あり。靴を
この地あり。刀の中央を。此の地あり。靴を
ん。この地あり。此の地あり。靴を
刀として。此の地あり。靴を
一。政廳に。置い。此の地あり。靴を
た。この地あり。此の地あり。靴を
ハ。この地あり。此の地あり。靴を
此の地あり。此の地あり。靴を

前原
府前
東前
を訂
言正

史上の人物と云ふは、此人もある。前原一誠や
その友人の死に人として、休養をせしめ、奥平
治政、その、その、ある。元和後と云ふ人も
未だ、六、民政長友、い、無、い、法、昔、
池、の、その、西、寺、分、信、も、東、の、地
い、ろ、く、ある、が、自、分、の、福、の、ぬ、人、の、い、る、有
く

一 西園寺侯が、ある、と、云、は、り、と、候、は、十七、歳、の
ゆ、め、ある、侯、は、自、分、の、家、に、も、妻、の、言、家、の、和
氏、家、に、も、来、り、自、分、の、家、に、も、あ、り、と、云、は、れ、
た、る、押、さ、も、の、歎、と、自、分、の、夜、を、い、け
と、云、は、る、前、原、を、い、う、書、の、原、に、い、く、と、云、は、れ、

あ、ゆ、し、政、能、く、日、勤、と、い、ふ、の、奥、平、が、お、え
と、ある、を、い、ひ、ま、う、い、ふ、も、今、の、家、に、あ、り、奥
平、丈、は、後、年、今、の、家、を、岩、崎、邸、居、の、由、
一、比、後、で、い、う、と、云、は、れ、来、り、和、後、と
云、ふ、人、は、前、原、の、陣、居、に、の、長、つ、い、う、自、分、の、
其、院、十、三、歳、在、り、と、云、は、れ、日、久、陣、居、
、お、姓、見、習、と、い、ふ、の、奥、平、が、
勤、し、め、狂、の、言、後、を、受、け、と、云、は、れ、人、の、
後、年、洋、行、中、冬、を、い、う、と、云、は、れ、
片、の、言、に、い、ふ、人、と、い、ふ、事、も、い、う、と、云、は、れ、
此、の、言、は、れ、ま、す、と、云、は、れ、

一 西園寺侯、現在の人のあるが、その代、
見

しに限りなりと過つたことあり無し、改まるるに
後那の無し自合に元をいさし縁遠ひあり、
前原うと藤の乱り前自合う年をいさし
中出まさんといことありし能公(美雅)
に付つれ木槐所の花鳥に合しそのご
言後ひある、花和りといま後をいさし
閑係七あるが自合に長しに比し洋行中
後し比其うさうと事あるに紙上に見
て懐舊の感に打んを北人のうちか
のあつとありしか、その後何人に支へて
見せしむる人の無し、

一 自合は丸のちつて七園境に地を丸ひき

丸のちつて七園境に育つて何れ自合は丸
ひきか取入るあつたもの、園境の感に
縁無し無し、後年自合に改次上の故味を
感し事勢の代●とをいし、後流したる北
茅のお蔭と謂ひさうと得ぬ、あつて北
方面の合しと収むあつた、

一 自合の古物の後み如あはあ六歳の時、
三字経をいさし考経とよみ順序かあつた
家、家庭教師として温順な、遠海に原
とよみ人があつた来とよみん、六鶴田法
印のちつて毎におひい出、けり、北の鶴田
とよみ人、いさしの誦法社を創りて

比治より自今と神社の社殿に敷をきけは、此
の宮の今よりくると言ふ元すなはちしきせの
ちうは、勿論自分獨りい誰れも年々同定多
どちうに記ひする、何れも人の酒をぬや報
る社殿の壇に酒を温め、今も七日前にあ
るが、大まき井、藪野十太を入丸ナリ
御座る、杯を平しと敷へは、よれ、此人
の事、数年前まゝ人、垂しくあまこと
と得る、うに、人五、年の、個人、治、中
の、休、め、を、淡、み、如、の、其、人、物、を、知、り、以、思、考
、珍、しい、お、も、し、ろ、い、人、物、が、あ、つ、た、此、人、の
勤、王、の、事、始、り、や、其、の、他、の、個人、治、中

しつとあつた

一 鶴岡の本宅、寺子屋を考へてその社殿だが、自
分獨り、いつも社殿に、其、法、を、受、け、た、自、今、を、物
別、に、過、し、た、よ、と、思、ふ、自、今、の、本、宅、を、寺
子、屋、に、入、つ、た、こ、と、無、かつ、た、此、法、印、は、さ、の、く
氣、を、換、へ、る、ひ、高、家、に、護、め、る、を、云、ふ、こ、と、は、
つ、と、い、ふ、何、れ、の、物、か、に、扱、つ、た、よ、の、う、ち、あ、つ、た、
ま、法、印、に、自、今、に、我、信、の、る、動、つ、あ、つ、た、
叩、き、ま、さ、ん、叩、き、ま、さ、ん、こ、と、が、あ、つ、た、其、次
に、行、く、時、に、父、の、僕、に、松、茸、を、お、も、ち、ま、前、の
の、を、記、し、た、と、い、ふ、こ、と、を、い、ふ、こ、と、に、記、し、
て、居、る、印、の、の、を、と、外、に、此、人、の、つ、ま、松、茸、の

記帳してをぬが、幼の時代の所々を特に
此へを尋ねるの事、心に在り侍ふべき人である
いふは、此へに語を尋ねて、教父(あがき)とい
ふも、此へに、^{おや}おやを語らぬ、自分から
そのおやに、其使をいつと見え

……鶴田の侍を入る……

鶴田宮

字ハ公宮通称真人大塊又川来と稱す

お原の人

大塊倭僮三つ郎の士道家者流に隠る者多し先
大和の大峰山に住り佐々木氏武を以て著りる永祿中
城後に来り佐々木氏地福院城を以て上杉氏に仕
ひしに佐々木氏に遊し亦佐々木氏を奉り多寶院を
お原に建てしに佐々木氏佐々木氏中鎮護寺と改称
し諏訪神社の初宮を築き十五世の孫を皎巖と
いふ道名あり大塊乃其子なり家子と皎巖と
受什皇漢の子を川田嶋田嶋に開き世を字多と
更い著し佐々木氏字多源氏と出づる所の所といふ

萬延年中上洛して大光達河倉梨法印と叙せら
るる禁禁全衣と許さる明治己巳神佛混淆の
禁あり復節しめて又鶴田世に更の真人と稱す
性慷慨し其氣を貫く風を同志と勤王を唱ふ
慶應丙辰赤松志曾我士郎三浦恒望原重
信伊藤孫連花等と謀る所あり乃ち是花を以
て高市に托して赤松と名し出入りしを鶴田上
原の志士と譽る息を通り戊辰七月官軍新井田
城に入ると少失を謀り此城を助一隊を以て水原
と略し先鋒會議所を置り大塊微とんて惟
以て其の村松城を攻むるや途に阿賀野川の
要あり敵兵西岸を扼し敵を戒むる

官軍勇る偵察し因む大塊私に暗夜に乘し上流を
渡つて詳に敵情を探り帰つて之を報す是に於て
大旗直に今田村より進み西岸の敵兵を駆逐し一
本一の村を越え板敷橋と云ふ川口より津川を衝
く大塊總守と云ふ敵軍あり事平らき官軍
之を賞せしむる大塊辭して早く方外に流何ぞ思
賞を徴めむと因て同志の功を推奉し袂を拂ふに
而して物々時人以此傍西行の風ありと為る後
神明宮・祠官と为りて疾二月病らして歿す
享年五十又四十四の博愛堂と其人を稱す曰
く吾師の道家馬流等と兼道と兼生に授く
所謂俗様の者なり大塊獨り時俗に媚むる断

然唐柳と取り人或之と議すも願ふ可明流の初
一村一祠の制去て酒訪神祀を神の宮に合す大
塊乃ち酒訪の神樂を焚燬し御堂を一一
勇断に致さうしむ石動勝先又曰く大塊尤も
易理に精し竟く簾肆の衣平と云ふい御堂
中人を駭かるとも中半以後棄て去るると山亦
をぬみしと云ふ中半以後棄て去るると山亦
郎高小技大丈夫沈りあつたつ所とするか貴
稿一事ありて自天に因て抄示と得

春日雨中

街頭泥滑少人行日、茅樓厭雨聲
以未推敲先不定、花因移植偶延榮

露芽一梳時睡、首葉三盃恰過、
春光無定許、掩門徒過好、

夏魁即事

胡床夢元日西斜、酒渴呼童滌苦茶
忽見瓢搖簾自捲、魁風旋轉雪毬花

夏日雜詠

謝家柴門盡不開、看書眼供里甜催、夕
陽斜在隣園樹、涼影小山屋裏來
遠雷勢細者、水楊前、風滿四檐涼似船
何處早村先得雨、殘雲走過月空天
晴湖亦と云ふい夏、生動、五山也、
物事又舟中即事、

極目蒼蒼花叢毛新停舟獨上大江渡
市陽在汀洲外八尺枯茶壺欲印没人
充我河管望川上の克星多う佐の川を渡
つて敵情を偵察する安んを亦河中の地
上降せし罪人を知らぬや三

北法印と其頃鎮護寺抄と云ひ或は宮丸抄と云
て指つた寺にあらむと云ふ宮丸と云ふは何所
に日久しく思つて居つたに五十年の記が如し
此等の意味の宮丸と云ふは其名の敵
語を添くたのむあつた

一 心やうの鶴のふかに中津玄伴と云ふその名も
そのたこれと敵をと云ふと一は外に鶴のふか三
浦東と云ふそのあつたに北葦の吟ふ自分
の家は継来しにふかに中津ハ時と講釈
ふをうて来たは花子の海程を或のうをうた
ことかあるか冷自合のゆめあつたをうた
七のうらうらうらに叔父あり吾入や其反人が
聴せあるひあつた北中津ハ余の曾祖父ハ
おの意定ま住まうて居つた其の書を傳
お伊左衛門の守り申の川を濁らた所であ
つた三浦東に中津のぬき温籍の人びと
高敷の人びとあつた為めあつた時駱馬心高

家と家の行きかう馬(リ)に[●]余)中心に友軍
 :殺せられた、あつたあつた(心)あつた(心)あつた
 事のぶい(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)

一
 心の中にいゝくつるあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 輩の上(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 父のあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 所(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 家族一(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 此(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 (心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 後(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)

すう

一
 此(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 う(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 不(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 う(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 家(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 此(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 事(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 心(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 此(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 心(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)
 位(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)とあつた(心)

一 維新前後の事々々家々も何となくつてその
の心が、連今流生もこれを併し相あつたを
得ず、先考の流盛も流出好まむあつたに
其の中、~~其の中~~ 内定ももエラリ見れば、
連あつ、財産の位あつたにあり、全盛の
で七の家を清くも、無つたにあり、
併し世帯も、~~其の中~~ 即ち此の事々家々も
自らの家であつたに、その原因は、
の流し、四折葉を、~~其の中~~ 大波あつ
と交る、~~其の中~~、~~其の中~~、~~其の中~~、
随分の晩年、~~其の中~~、~~其の中~~、
命を合を、~~其の中~~、~~其の中~~、

用務の事を家々頼つて、~~其の中~~、
先考の流生も、~~其の中~~、
漸之に、~~其の中~~、
頼ん、~~其の中~~、
わめつ、~~其の中~~、
り、~~其の中~~、

一 今も二十数年、~~其の中~~、
此の流生も、~~其の中~~、
と、~~其の中~~、
こ、~~其の中~~、
の横木爪、~~其の中~~、
一 園の記、~~其の中~~、

一 あの家の模枋や彫刻の度々やせぬと
 くしいまの略すがこゝろあつたやうな眼に映
 して今もあつたに似てゐるやうな家
 も思つた。あつたに似てゐるやうな家
 五月熾とあつた馬鹿くしいやうな
 家のあつたに似てゐるやうな家
 幅四五間もあつたに似てゐるやうな家
 の大小と家の大小と或る意味を志す
 るやうな家。風の流るゝとする方
 の中もあつたに似てゐるやうな家
 の大坂の堅硬の紙ひ出つてあつた
 の大きなものか之んと思ふが
 十二

或人として轉轉仕掛けたと
 き、あの家の模枋や彫刻や
 彫刻の度々やせぬと
 あつたに似てゐるやうな家
 は一と云ふこと

一 風の音をまよふやうな
 が自分かハゆのやうな世に
 没交渉なやうな風のやうな
 ハ叔父のやうな君が大きな
 自分を前掛けた風を揚げて
 のう一つの原因、今一つは
 う流るゝやうな風の物も

を弄するまじはる地あるまじあゆの表平時代
てあはかこを切るとは地も出来は許すもあるあ
母 時國の風柱と謂ふは比りと自らのるを言
つたのむせうお父のことと云つたむせう、余
家もあるとしあつた男子の二國を併し
よあむはる風ぬきであつた

北河と徳川氏の末路は後長明代の元後むあ
つた、自らの家をも食家らうい文人ういらく
来は、自らの家らういらく、その内むはる世と
よあむはる坊頭の家刻河う長くもあつた
つた北人のち姓や姓もあつたむせう、
井及満池の星うはる世と云ふは、そのむはる

て四世のれうあつたむせう、北河の
えは、家刻はあつた出来は、北人の刻は印
やあつたむせう、家はあつたむせう、北河は
雷様(北河)と云ふ画家うあつたむせう
終に余う家はあつた、北河は長明の系
のものあつた、北河は長明の大家は
のあつたむせう、つたむせう、雷様は
我と云ふと出た、北河は長明の系
のあつたむせう、家はあつたむせう、
南河と云ふ家はあつた、雷様は
本はあつた、家はあつた、雷様は
あつた、家はあつた、雷様は

八の字をえんじうにんか金の家に言ふ所を四
 う以、桂河と云ふ家も金の家に云ふ
 その如く此の桂河の風門に入る家薩州松本
 の者う出来比と云ふありあり、後、其の出来比著
 耕心一生を終るは、吾様の感化ひきつら家
 に出入るゝもの一人画家の出来比、その如く
 高橋耕雲と云ふ、家の伝書此の仙遊の
 家直と云ふん比と云ふ、七あるは、まんを仙遊
 神田と云ふ、利助と云ふ、この如く、叔父も
 吾人う仙遊をやらんたりの利助の感化ひきつ
 べ又叔父の如く著るゝが、叔父利助と云
 べん比と云ふ、仙遊の感化ひきつら大人の者をと

能くもえんじうにんか金の家に言ふ所を四
 秋中夜をゆりし、毎年叔父清方をとるく
 江戸へ登るをせしとをいん比、金の切の
 時代、この先方の清方、この如く、或る板比
 堆をうしと云ふ、如く、この如く、大家の
 楷者ひあつた、先方、楷者、天才ひあつ
 比と思ふを、先方の比、能くもえんじうに
 女兄弟の美推君も、能くもえんじうに
 と云ふ、仙遊、この如く、仙遊、この如く、
 一、幼く文筆の如く、言ひ、言ひ、言ひ、
 とも、仙遊、この如く、仙遊、この如く、

抹茶をきりたしむる當祖母の配儀も抹茶の
風味うちつて茶器と土器（茶碗）の満
ちそつた傳（傳）當祖母も茶をきりたしむる先
考も茶儀に直してきりたしむる事
ころ當祖母の幼少より自今も茶をきり
えんが（茶）の味も他とちがふべし
と唱ふる茶子の粉を用ひ●と、自今も
當祖母の所お茶器と幼少より欲し
かつた當祖母は長女後めらるる事と
細せんが終つた物のこととて受年那ら
ぬと、いんちりうくの表味の記しつてそ
當祖母改葬のものひきつて大かたに
十二

その此茶の味も其時の因に自今も風味の
董化をきりたしむる事と

一 お一車のおもむきん叔父うらむ次中入ん
か家一に持田油味噌の取寄を道取をきり
と一命と云ふ（命）の尊神ひきつる家と
別の此が此の叔父君の邊藉の人ひき書を相
あに書きえん此もいんちりうくの董化の味
ころ當祖母の傳入の歌集やお傳類を
和采にきりたしむる事と、其の揮毫の此の叔父
君の例もいんちりうくも自今も幼少の
此牡丹をきりたしむる事と、其のありが、
今も遺墨が片紙七枚七のりを遺儀

とつら

一 曾祖母の配偶と若い頃上方より本骨路を
往し旅行せられたことあるの如く幼少の時切
旅行中の事と物修りありありの如くの名
所回分七溪長尾に備いんをあらつて旅
折返り出る時々々その本々々々々々々
えと幼少の頃と何と云ふ事し
ろく忠つと、別と名所回分の挿話を
えと云ふと大ぬきであつた、曾祖母の旅行
中、彼處や此處や其他名所の演述は
種々多量なるやを記念するとして集めて
之らん、らん、らん、朱漆の地名の録しん

このを夏にあらとある所の田へ入んて床の上
に置き、まんこに付てりうく思ひ出を語ら
ん

一 母と人の趣味ともその心々々草双鳥を後
あまたあつて毎年数回母の日記に記す
るなりうくの傍々相と云ふをて後米
几ん、程々ハお記るを語らうとて志ん
く聴へはよめい、此の傍々相を持てる
私脚、母と錦織の新敗や思ふに無
珍らしいものを自分のお茶に相の市一
しあひ、いつ七返りの本々の心を結る
とらうと云ふ

子大形のもの、西洋流、才何強しと云ふ大
小の區別を主とするんが吾家のと確うん
一節は、此の以上大なる離人形の上
に松を母にうらうらとびあうん、
本すあ、月井、一室を裏とらむ、内表
の壁に見上るる、すく、枯々天井、
位であつた、此のあまの印、
離と飾り、
七飯村とよ、
自分の家の、
あつた、

伯龍とよ、
十二

：ありありし連の清神ををらふこと、
此人、
つと、
つと、
味のある書、
思ひんる

一
自分の乳母、
一、
而部、
て、

判^がふるふるに、下婢せ。我が自分
 の乳母と云ふを呼び木の乳母をかしは
 と呼びてその時に、自分の乳母は江戸の
 物屋の嫁にそれの日、此より六歳の時に云
 つに、その時、自分、此の物屋。ちつ
 うつて曾祖母。、為りぬる時、此の物
 屋を此つとん、ヤット、~~此~~^此のことを思ひ
 出す

一
 此の家、養子にありんは、此の家、此の家、
 此の家、養子にありんは、此の家、此の家、
 此の家、養子にありんは、此の家、此の家、
 此の家、養子にありんは、此の家、此の家、
 此の家、養子にありんは、此の家、此の家、

ハ抱えんて寝た、叔父は自分の親戚と肌膚
 を男子に抱しいと云いんは、幼少の治抱
 えんて寝たこと、あること、叔父は、此の
 親戚に印を刻せんは、自分、山形を
 ひと、此の印を、自ら、此の、
 れを、此の、
 あつて

一
 叔父の、此の家、先考の、此の家、
 月、此の家、
 僕、此の家、
 此の、
 吾君も、此の家、

寺いし其んえんた。そのためのえんへも勉強し
毎日攻うけにことを思ひ出す

一 各々の飲料の作りこむい所であつたが、自今
家の井戸は、沼の上方であつた、井戸は
くは、家の庭内は、榎の大樹があつた、
あつた、その、近所の、おを、
と無難に許す、おを、
まうに扱は

一 大人ふまを、おを、
を、おを、
おを、
おを、
おを、
おを、

望：港へは、墨汁と合まらぬ一揮、
の一行とせえんたことある、その、
おを、
おを、
おを、

一 各々の陣危に、あつた、
つた、
おを、
おを、
おを、
おを、
おを、
おを、
おを、
おを、

今の子は叔母の子であるがその兄の如く
と云ふが自分と同年にも厚太郎と云ふ
此の夫死しその幼時大仲養し其の
此の時厚太郎は自分の内へ
に其の心は深くの懐びをきつたが今を
思ひ出しして悪縁をきつたものと云ふ
と果んると。○家の前二階の一平が戸
は仕切れて備部屋と云うてその
非二人の家内中をあん田つてこゝと這
入ると平の四五の床を取つて切り片付
けし無いはをこゝ二人に申合はせ
の床に小便をとりて垂ん流しし

つらき事
の事

女顔を極めとんば、多分寝あ便と
へこたふかつけし果てあつたは、
の行なぬ部屋にありし、
哉と誰れか氣をとり付りしと云ふ
を河野と云ふが仕立とあつた
心も多し所は、
外城堤と出湯むちつは、外城と堤
二通家能の家のちあつた、
池の出つた、
可ろろ屋ろい池がある、
や河骨を生し、
つた池の周囲は、

えとあつて花時の艇を渡へしきりて
感えふよのむあつて出湯一里以上ある
こゝ父もも伴ひて行かん行かん
つと今の洞春後七無の頃心
振らるるつとが、漢法日かじが
難を取らぬ出湯に格けり一里ある
つと僅うして心と加鳥死び生来し
たかすれのい里に遊びにあるる氣を
がしと

前原一誠(まへはら)の我家に相しとことと
前七寸記しとが、古き事つとことと氣に
付いと、戦後府に設けんとことと
いと、思ひ連び、府に設けんとことと前
であつと柳比、前原は只時合巻誠格の人
であつと、今も心大匠格の人ひあることと
其人のもう病しとのを老家ひも元業と
しとこととつと、家の本座あ、七明と居
つとに前原の希世ひあつとことと母屋
つとに女宿とが邸内の隠宅に宿す
しとことと浄徳宅全部をわけて其の宿所
とつと、下の坐敷に座接所を用ひて

とらしく、前原は二階を居室とし寢所
も同じく二階にあり、妻妾は伴見が
三人の小姓が随従して居つた、此の三人は
皆高麗人の裔であつた故に、皆高麗人の
と云ふ一人の後、郷人伊原孫退治の巻
子と云つた、伊原孫退治であつた、此の
某京英法を扱時代、田舎と云つたこ
ともあり、大審院の判事と云ふ人
はつた者

前原と云ふ人の顔面は、産痕のある
物も無垢着る沈黙の人であつた朝
は今の十時頃迄も寝て居る人

鷹馬揚る人であつた、金銀をとり、
傾着るく、を家にあつても、
をを拂ふむも、亦吾家には、
いさゝか積るお具の海に、
いくらの俸を得るものあり、
が奉書紙に月俸を記す、
あはれの俵、居室の縁を、
問(奉書紙)の床の、
幕形に壁に塗つてあつた、
云んらむと物隠し、
つた、投げ込む、
塩梅であつた、

いふ無くえらむと云ふ評は前原を元捲く
あつた有志家より多く無心をこころと
その金と捲き上げた、固執する評はあ
らうお原を去る時、旅費も無い程であ
れども、余りの家より武許へ出るに任
じあつた

斯く大官の福所と云ふは老家、朝夕
訪ひ来る各方面の人々も少くも、進物
をもち込んできたのも多し、中々
魚類をもち持つて来て、夏時、雨
の内に指揮を言付けたり、出来たりといふ

らぬと云ふ正真正正の進物の魚類を其儘
して置いたが、無物着の主人公も
あつた、氣のつく人からいふ、後
指揮を待たず、いふ、出来たりといふ

前原の止宿中、あつた時、裏門よりつり
と這入つて来た壯士、刀のふりか
らう、刀の威嚇、しるべき、兵
大刀を揮ひ、眼光炯々、雨色漆の如
く、あつた、畏れ、いふ、杖子、あつた
む、長門の者、家の様、いふ、何
と、前原を、いふ、いふ、いふ

此七云リテ、大庭より前原のそとより二階
こ上のつと、こんう奥平は正徳輔であ
つた、あ人の記文の問柄は、先年権上西
念びあつた預子に、二階ひあ人おる
一は時を、ア一末に、と前原を
尚平に、云つた切りあつた、と百姓の
説しである

一 奥平の訪ひ来つた意味は解らるゝ後
、奥平が依傍政廳の長官とある、
を、より考へん、或は前原を呼ひ寄
せしよの歎き、と中央政府を、
余と考へて来たとある、かう判

しもあつた、先は前原の、前原
と同重に起臥し

一 奥平とあ人の前原といふ、性格の
異つて居つた、あ人も性急で、酒は汁
酒も辞せぬ、と、概して朝の勢、
起きると大勢、と、舌を淡み、
人と淡み、と、常々懐恨の氣を、
動作の快活と云い、と、暴に、
、と、亦も、と、物を修め、
揮毫し、紙に、と、三と、
を、病、と、書、と、此人の、
、と、所、と、

性格全く異つた而も一時同室に起
 臥したの事真に奇観に非姓は其
 頃先長に誘つたと言ふを少くも
 友人同衾して朝するると奥平に
 天の事さうさうに血内は大驚に後
 おも考へて前原の眠を気まぎれの
 事と前原も辨れしとおぬしと因
 此と謂つた事さうさ

前原も奥平も其を愛しは扱ひあつ
 た、此れく見才う也と云ふ事を
 連ね込め筆を弄るとさうな事も
 さうな、各部氣味であつた事さうさ

日惟の峰のこころを推し
 之ける所を類を考へて考つた
 こともある、今も是れを推し、奥
 平の考へて考へたは二字類の文に
 被懐とあるは、此れ考へて考へた
 事も、今も考へて考へた事さうと
 謂ふべき也、今も考へて考へた事
 七言五言に家族を稱し、以次、奥平
 の考へて考へた事さう、今も考へた
 前原の考へて考へた事さう、今も考へた
 此考へて考へた事さう、今も考へた
 此考へて考へた事さう、今も考へた

念のたえ幅に整へて巻くとす。又
奥平の物語後知る家ありき。これ
長瀬ハハしく手巻のそとに顔
とありてその比ふものなり。余の
手にゆし巻とてある。前原の
遺物として其の所原をある時に
先づ此に集つて研一う一面あるまう
比

一 奥平の伝はるる時、戦のひあつ
たりどうういふんが自分と連れ
行きたといふふたさうに、家む
いふころに、うめうめとて、うめ
一 奥平の伝はるる時、戦のひあつ
たりどうういふんが自分と連れ
行きたといふふたさうに、家む
いふころに、うめうめとて、うめ
一 奥平の伝はるる時、戦のひあつ
たりどうういふんが自分と連れ
行きたといふふたさうに、家む
いふころに、うめうめとて、うめ

こゝに遊びに来たことのある、其の
るひに膝のあつた例の如く大酒を飲
たれば、下物というく要る方であつ
た物に、飯とることをすべしこの物
乍け梅干、むしらふ例にあつた
ある時、飯後、塩をこぼし、横臥して居
るのを、是れを、吾々の先考と
歎く。墨を塗つて、飲んだことある
る又ある時、是れを先考とせば、河
原、教養に出うけたれば、何家の
尤う、奥平の前を、遊ぶこと、思ふ
佩刀を抜き、斬えんとし、追ひ

その終、ぬかす、**奥平**と
いふ、**奥平**最後の別れであつた
前原、**奥平**自身、ある、**奥平**
通家、能く、**奥平**と、**奥平**
森と、**奥平**、**奥平**、**奥平**
る、**奥平**、**奥平**、**奥平**
の、**奥平**、**奥平**、**奥平**
士族が、**奥平**、**奥平**、**奥平**
と、**奥平**、**奥平**、**奥平**
く、**奥平**、**奥平**、**奥平**
て、**奥平**、**奥平**、**奥平**

何うの言葉かと言はん此の今と心
 ん比、えい前原と今(前原)の最後
 ひある

前原の大臣格の人であつたが、保守
 人の王政後の政府に重税を課
 すとすふ不平あり、賦税、未ても
 中央政府に物を手擧げ、以て税を
 免したることありて、増正さして強
 制を多うけたる官を罷め、ん終に
 ゆきの上野と合はしてのひある、大隈
 侯ハ前原と強制したる向ひあり
 が前原一味に激徒うき多く、優に

暗殺に遇はんことをあつては
 るんことありある

西条のこと、村益、而も吾輩の既
 順き佐人の家、傳、佐伯してあり
 奥の平、すまう、まゝ、そん、も
 不自、の、居、ま、を、た、ら、し、る、と、今、も
 居、る、こ、と、あ、る、奥、平、と、方、生、肌、の、あ
 る、と、強、を、あ、思、儀、を、無、い、と、せ、さ、ん、と、
 とい、い、こ、し、後、年、に、は、も、自、分、の、お、
 ち、に、没、け、ん、に、は、な、る、者、故、に、入、る、し
 以、て、早、い、(西、條、の、早、い、) 高、橋、の
 秋月、行、村、に、お、け、り、ま、す、に、序、に、物

又なる事なるを家名に引寄せし
代りてしし秋月ハ三九ニ推す
の印と推すことを許しし位
ひさうに、秋月ハ三九ニ推す
容脈の母大なる私印(御題
下黙印文云一秋月控附一漢
高苗高)とそ款と家名と
つと云つた

一
秋月ハ三九の家、這中、他
何道書揚々中、此方とる文
とむつとらん外、四五の幅
とありし、今方何とる、此

ハ印と書しを他くつた、
此家名の山物遺物を秋月
のそ家、由互比とて、去後、
捨すると、表裏の家、扉に未
の山、此のちいし、あつた、
を、書し、七者、人、ひ、あ、
う、と、う、た

大正七年三月三日書す

夕、月、五、六、才、位、る、
夕、の、ち、と、く、ま、
庭、の、歴、史、や、由、来、を、
の、る、位、を、か、ち、つ、
其、の、園、境

と拂し出すと、此の條を考へらるるも、此の大切に
うつし、且つ其の味も、自らアガリ、えつ、即ち此の思
出と考へらるるも、此の思



田覽錄

十二



